

名前

---

**【考え方の癖について考えよう！ ～映画『12 人の優しい日本人』から～】**

- 1) ねらい：哲学プラクティスはいかに及ばず、広く「対話」の基礎中の基礎となる「考え方」や「態度」について全員で再考してみようと思います。
- 2) 内 容：下記の課題映画を事前に鑑賞して来てください。任意の条件下で、12 人の登場人物の中から「評価できる人物」と「評価できない人物」の二人をとりあげ、それぞれについて評価の対象とする事実やどう評価しているのかというポイントなどを話して考えてみます。
- 3) 内 訳：30 分；イントロ（「よく対話するためになにができるか」）  
20 分；映画の内容の確認、評価シートの記入  
20 分；各人の評価シートの発表  
80 分；意見交換、まとめ
- 4) 持ち物： 筆記用具
- 5) 注 意：事前に下記を必ず観ておくこと。  
◆コメディ映画『12 人の優しい日本人』中原俊監督、三谷幸喜脚本（1991）

**もっとも評価できる人物（その理由）**

**もっとも評価できない人物（その理由）**

**陪審員 1 号:塩見三省**

40 歳の女子高校体育教師。本件では陪審員長を務める。4 年前にも陪審員の経験がある。

**陪審員 2 号:相島一之**

28 歳の精密機械製造会社の社員。裁判自体に疑問を抱く。気は弱いが頑固。妻と別居している。

**陪審員 3 号:上田耕一**

49 歳の喫茶店店主。真面目な議論や会議が苦手なアル中の中年男。

**陪審員 4 号:二瓶鮎一**

61 歳の元信用金庫職員。被告は無罪という意見を終始一貫して変えなかった唯一の人物。

**陪審員 5 号:中村まり子**

37 歳の商事会社庶務係。気が強いキャリアウーマン。公判の内容も全てメモしているというメモ魔。

**陪審員 6 号:大河内浩**

34 歳の医薬品会社セールスマン。早く仕事に戻りたいらしく、審議も上の空である。

**陪審員 7 号:梶原善**

32 歳。現在はしがない職人だが、実家は資産家らしい。べらんめえ口調で気性が激しい。独身。

**陪審員 8 号:山下容莉枝**

29 歳の主婦。被告女性と同世代。マイペースで天然ボケだが場に流されやすく、意見が変わりやすい。

**陪審員 9 号:村松克己**

51 歳の開業歯科医。冷静沈着で良識人な印象だが、自信家で偏屈な一面もある。

**陪審員 10 号:林美智子**

50 歳のクリーニング店経営者。気弱だが純真。タバコの煙が苦手。

**陪審員 11 号:豊川悦司**

年齢不詳の役者男。最初は議論に全く参加しなかったが、中盤で「自分は弁護士」だと言って積極的に参加し始める。

**陪審員 12 号:加藤善博**

30 歳の大手スーパー課長補佐。仕切りたがりで、9 号曰く「理性でものを考えるタイプ」。

**守衛:久保晶**

**ピザ屋の配達員:近藤芳正**

選択条件 1 : この審理で、陪審員として最も「活躍」したと思うのは誰ですか？

**【考え方の癖について考えよう！ ～映画『12 人の優しい日本人』から～】**

- 1) ねらい : 哲学プラクティスはいかに及ばず、広く「対話」の基礎中の基礎となる「考え方」や「態度」について全員で再考してみようと思います。
- 2) 内 容 : 下記の課題映画を事前に鑑賞して来てください。任意の条件下で、12 人の登場人物の中から「評価できる人物」と「評価できない人物」の二人をとりあげ、それぞれについて評価の対象とする事実やどう評価しているのかというポイントなどを話して考えてみます。
- 3) 内 訳 : 30 分 ; イン트로 (「よく対話するためになにができるか」)  
20 分 ; 映画の内容の確認、評価シートの記入  
20 分 ; 各人の評価シートの発表  
80 分 ; 意見交換、まとめ 4) 持ち物 : 筆記用具
- 5) 注 意 : 事前に下記を必ず観ておくこと。  
◆コメディ映画『12 人の優しい日本人』中原俊監督、三谷幸喜脚本 (1991)

**最も活躍した人物 (その理由)**

**最も活躍しなかった人物 (その理由)**

**陪審員 1 号:塩見三省**

40 歳の女子高校体育教師。本件では陪審員長を務める。4 年前にも陪審員の経験がある。

**陪審員 2 号:相島一之**

28 歳の精密機械製造会社の社員。裁判自体に疑問を抱く。気は弱いが頑固。妻と別居している。

**陪審員 3 号:上田耕一**

49 歳の喫茶店店主。真面目な議論や会議が苦手なアル中の中年男。

**陪審員 4 号:二瓶鮫一**

61 歳の元信用金庫職員。被告は無罪という意見を終始一貫して変えなかった唯一の人物。

**陪審員 5 号:中村まり子**

37 歳の商事会社庶務係。気が強いキャリアウーマン。公判の内容も全てメモしているというメモ魔。

**陪審員 6 号:大河内浩**

34 歳の医薬品会社セールスマン。早く仕事に戻りたいらしく、審議も上の空である。

**陪審員 7 号:梶原善**

32 歳。現在はしがない職人だが、実家は資産家らしい。べらんめえ口調で気性が激しい。独身。

**陪審員 8 号:山下容莉枝**

29 歳の主婦。被告女性と同世代。マイペースで天然ボケだが場に流されやすく、意見が変わりやすい。

**陪審員 9 号:村松克己**

51 歳の開業歯科医。冷静沈着で良識人な印象だが、自信家で偏屈な一面もある。

**陪審員 10 号:林美智子**

50 歳のクリーニング店経営者。気弱だが純真。タバコの煙が苦手。

**陪審員 11 号:豊川悦司**

年齢不詳の役者男。最初は議論に全く参加しなかったが、中盤で「自分は弁護士」だと言って積極的に参加し始める。

**陪審員 12 号:加藤善博**

30 歳の大手スーパー課長補佐。仕切りたがりで、9 号曰く「理性でものを考えるタイプ」。

**守衛:久保晶**

**ピザ屋の配達員:近藤芳正**

選択条件 2 : この審理で陪審員として最も「誠実」だったと思うのは誰ですか？

**【考え方の癖について考えよう！ ～映画『12 人の優しい日本人』から～】**

- 1) ねらい : 哲学プラクティスはいかに及ばず、広く「対話」の基礎中の基礎となる「考え方」や「態度」について全員で再考してみようと思います。
- 2) 内 容 : 下記の課題映画を事前に鑑賞して来てください。任意の条件下で、12 人の登場人物の中から「評価できる人物」と「評価できない人物」の二人をとりあげ、それぞれについて評価の対象とする事実やどう評価しているのかというポイントなどを話して考えてみます。
- 3) 内 訳 : 30 分 ; イン트로 (「よく対話するためになにができるか」)  
20 分 ; 映画の内容の確認、評価シートの記入  
20 分 ; 各人の評価シートの発表  
80 分 ; 意見交換、まとめ 4) 持ち物 : 筆記用具
- 5) 注 意 : 事前に下記を必ず観ておくこと。  
◆コメディ映画『12 人の優しい日本人』中原俊監督、三谷幸喜脚本 (1991)

**最も誠実だったと思う人物 (その理由)**

**最も誠実でなかったと思う人物 (その理由)**

**陪審員 1 号:塩見三省**

40 歳の女子高校体育教師。本件では陪審員長を務める。4 年前にも陪審員の経験がある。

**陪審員 2 号:相島一之**

28 歳の精密機械製造会社の社員。裁判自体に疑問を抱く。気は弱いが頑固。妻と別居している。

**陪審員 3 号:上田耕一**

49 歳の喫茶店店主。真面目な議論や会議が苦手なアル中の中年男。

**陪審員 4 号:二瓶鮫一**

61 歳の元信用金庫職員。被告は無罪という意見を終始一貫して変えなかった唯一の人物。

**陪審員 5 号:中村まり子**

37 歳の商事会社庶務係。気が強いキャリアウーマン。公判の内容も全てメモしているというメモ魔。

**陪審員 6 号:大河内浩**

34 歳の医薬品会社セールスマン。早く仕事に戻りたいらしく、審議も上の空である。

**陪審員 7 号:梶原善**

32 歳。現在はしがない職人だが、実家は資産家らしい。べらんめえ口調で気性が激しい。独身。

**陪審員 8 号:山下容莉枝**

29 歳の主婦。被告女性と同世代。マイペースで天然ボケだが場に流されやすく、意見が変わりやすい。

**陪審員 9 号:村松克己**

51 歳の開業歯科医。冷静沈着で良識人な印象だが、自信家で偏屈な一面もある。

**陪審員 10 号:林美智子**

50 歳のクリーニング店経営者。気弱だが純真。タバコの煙が苦手。

**陪審員 11 号:豊川悦司**

年齢不詳の役者男。最初は議論に全く参加しなかったが、中盤で「自分は弁護士」だと言って積極的に参加し始める。

**陪審員 12 号:加藤善博**

30 歳の大手スーパー課長補佐。仕切りたがりで、9 号曰く「理性でものを考えるタイプ」。

**守衛:久保晶**

**ピザ屋の配達員:近藤芳正**

選択条件 3 : 再び、もっとも「評価できる」と思う人物は誰ですか？

**【考え方の癖について考えよう！ ～映画『12 人の優しい日本人』から～】**

- 1) ねらい : 哲学プラクティスはいかに及ばず、広く「対話」の基礎中の基礎となる「考え方」や「態度」について全員で再考してみようと思います。
- 2) 内 容 : 下記の課題映画を事前に鑑賞して来てください。任意の条件下で、12 人の登場人物の中から「評価できる人物」と「評価できない人物」の二人をとりあげ、それぞれについて評価の対象とする事実やどう評価しているのかというポイントなどを話して考えてみます。
- 3) 内 訳 : 30 分 ; イン트로 (「よく対話するためになにができるか」)  
20 分 ; 映画の内容の確認、評価シートの記入  
20 分 ; 各人の評価シートの発表  
80 分 ; 意見交換、まとめ 4) 持ち物 : 筆記用具
- 5) 注 意 : 事前に下記を必ず観ておくこと。  
◆コメディ映画『12 人の優しい日本人』中原俊監督、三谷幸喜脚本 (1991)

**もっとも評価できる人物 (その理由)**

**もっとも評価できない人物 (その理由)**

**陪審員 1 号:塩見三省**

40 歳の女子高校体育教師。本件では陪審員長を務める。4 年前にも陪審員の経験がある。

**陪審員 2 号:相島一之**

28 歳の精密機械製造会社の社員。裁判自体に疑問を抱く。気は弱いが頑固。妻と別居している。

**陪審員 3 号:上田耕一**

49 歳の喫茶店店主。真面目な議論や会議が苦手なアル中の中年男。

**陪審員 4 号:二瓶鮫一**

61 歳の元信用金庫職員。被告は無罪という意見を終始一貫して変えなかった唯一の人物。

**陪審員 5 号:中村まり子**

37 歳の商事会社庶務係。気が強いキャリアウーマン。公判の内容も全てメモしているというメモ魔。

**陪審員 6 号:大河内浩**

34 歳の医薬品会社セールスマン。早く仕事に戻りたいらしく、審議も上の空である。

**陪審員 7 号:梶原善**

32 歳。現在はしがない職人だが、実家は資産家らしい。べらんめえ口調で気性が激しい。独身。

**陪審員 8 号:山下容莉枝**

29 歳の主婦。被告女性と同世代。マイペースで天然ボケだが場に流されやすく、意見が変わりやすい。

**陪審員 9 号:村松克己**

51 歳の開業歯科医。冷静沈着で良識人な印象だが、自信家で偏屈な一面もある。

**陪審員 10 号:林美智子**

50 歳のクリーニング店経営者。気弱だが純真。タバコの煙が苦手。

**陪審員 11 号:豊川悦司**

年齢不詳の役者男。最初は議論に全く参加しなかったが、中盤で「自分は弁護士」だと言って積極的に参加し始める。

**陪審員 12 号:加藤善博**

30 歳の大手スーパー課長補佐。仕切りたがり、9 号曰く「理性でものを考えるタイプ」。

**守衛:久保晶**

**ピザ屋の配達員:近藤芳正**



まとめ;

●一緒に考えるということ ～『探究の共同体』より～

- ・「参加」…探究の共同体では、参加者が平等に発言することが奨励されるが、強制されはしない。
- ・「顔と顔が向き合った関係」…このような関係は探究の共同体にとって本質的ではないかもしれない。しかし、顔と顔を向き合わせることは非常に有益である。顔は、私たちが常に読み取り解釈しようとしている意味という複雑な構造物を収納する容器である。意味は、お互いに至近距離にある顔のきわめて生き生きとした特徴によって生み出されるのである。
- ・「熟慮」…熟慮には選択に関する考察が含まれている。私たちは熟慮するときに、いくつかの選択肢を取り上げて、それぞれの選択肢を支持する理由を吟味しながらよく検討するのである。熟慮はたいてい、判断を下す準備の段階で生じるので、そのプロセスは理由と選択肢の「比較考量」と言われる。熟慮をディベートと対比しておくのは有益かもしれない。熟慮においては、自分自身が信じている立場を他人に受け入れさせようとする必要はない。他方で、ディベートにおいては、他人に受け入れさせようとしている立場の正しさを自分が信じている必要はない。
- ・「問うこと」…どの問いも、世界の一部分を問いに付すことができるというグローバルな可能性を秘めている。そしてこのことが、可謬主義への道を開くのに役に立つ。可謬主義とは、自分が気づいていない間違いを発見するために、自分は間違っていると仮定することである。このことは明らかに、「正しい答え／間違った答え」という古めかしい二分法に対する新しい機会を常にうかがっていなければならない。これは習慣の問題ではない。そうではなくて、多くの実践と習慣は、たとえそれが十分に正当化されておらず価値が疑わしいものであっても、創造的に問うことによるのみ見出されうるものであるからである。
- ・「議論」…思考のスキルを伸ばすのに議論ほどよいものはない。このことはおそらくどの教科についても言えることだが、とりわけ思考力の育成を目的とした授業には当てはまる。何らかの理論的に重要な論争点をめぐって議論している仲間たちが、議論を通してある同じ教科に巻き込まれていくのが一番よい流れである。私たちが最もうまく推論したり、最も関連の深い知識を利用したり、最も理性的な判断力を発揮したりするのは、そのような場合においてなのである。

●『12人の優しい日本人』で描かれる“優しさ”

⇒「なんだかんだ言ってもみんな最後まで付き合う、つまり叱咤されたり激励されたり反目し合いながらも(結果的に)協力して、審理を全員合意の元に終わらせる。そして手打ちよろしく、友好的で清々しい気分になって帰っていくその素直さにある」(まさに「探究の共同体」的な)

### ●考え方の癖について考える

陪審審理に参加した12人の個性や立ち居振る舞いを、自分「どう見ているか」という観点から振り返る。陪審審理とは「有罪」か「無罪」かを判断する場であり、そこには有罪と無罪を分断する「法」が存在している。そして審理を行う彼ら进行评估しようと試みる我々の脳裏には、彼らの評価を判断するに足る「ルール」、「正しさ」のようなものが存在してると考えられる。

#### 設問0: 評価すること／「評価できる人物」

何気なく「評価する」という行為に触れてみることになるが、そのためには自分の持つ「評価軸」を参照せざるを得ない。その評価軸にもとづいてはじめて判断を下すことができる。しかし、漠然と「評価する」場合には、その評価軸が何であるのか明確になることは稀である。

#### 設問1: 活躍すること／「活躍した人物」

敢えてざっくりといえば、活躍とはつまり審理の結審に最大の貢献をした人物と言える。そのための言動や手がかり、決定的な判断を導き出した人物がそれに該当するだろう。反面、そのような貢献さえすれば、たった一度の発言でも、場を乱す発言をしていても、当該人物は最大の貢献者だということもできる。陪審審理の現場では、誰もが(できれば早くて簡単な)全員一致に到達したいと望んでいる。これはこの場における最大の幸福であり、貢献者とは、この幸福の最大化に最も寄与した人物のことでもある。

⇒ 幸福最大原理…功利主義 (Utilitarianism)

#### 設問2: 誠実なこと／「誠実だった人物」

しかし陪審員とは、国民のなかから選ばれてその任に当たるものであって、そこには自ずから責任が生じるものである(かもしれない)。「私」ひとりの身勝手な欲求のために、いい加減な振る舞いをすることが許されるのだろうか。陪審員としての「私」と、一個人そのものとしての「私」との間に線引きをしようとする可能性もある。そのような考え方をする人物にとっては、急いで結論をまとめる手腕に長けているような人物を、ただそれだけの理由で評価することはできない。重要なのは陪審員としての「道徳」や「責任感」であったり、さらにいえば「動機」だと考える人物もいるだろう。

⇒ 私は私のものか…自由至上主義 (リバタリアニズム)

普遍的な動機こそが大事になる…道徳哲学(カント)

#### 設問3: 再び、評価すること／「評価できる人物」

ここまでの流れを経て、再び自分自身の持つ「評価軸」と向き合うことになる。ここでは、これまでの議論を踏まえながら、「活躍」や「誠実」といった観点を消化した上で、再度、自分なりの評価を行うことになる。

⇒ 評価対象者を公平に、平等に取り扱う観点

「貢献」や「誠実」という観点を踏まえながら、共通する善を考える観点